

雁木町家の空き家活用メニュー開発と地域連携強化

一般社団法人 雁木のまち再生
代表理事 関 由有子

上越市の雁木は風土の特徴的な景観であるが、住民の高齢化と転出で雁木通りに空き家が増えている。雁木コミュニティと外部との連携を探りながら、次世代への継承を目指す。(継続3年目)

2年間の事業を振り返る

雁木の連なる新潟県上越市高田地区は、城下町の街道に沿う町家地区に「雁木通り」が形成されて、雪国の地域コミュニティを支えてきたが、『空き店舗・空き家・空き地』が増えている。その一方、コロナ対策としての地方居住もあり、様々な事情によるUIターンや移住から、起業の動きもある。高齢化に悩む地域住民には、受容の意向も見られている。

高田の東を流れる関川を越えて、稲田から四ヶ所・戸野目地区は、旧地主の保阪家を中心に江戸時代から昭和半ばまで地域の稲作経済を支えていた。

戦後の農地解放と経済成長を経て、道路整備と農地の宅地開発が続いたが、旧街道に沿う雁木通りは寂れて、空き家の放置による老朽化が散見される。

立派な商家だった町家は、既に日常的に住み続けるのは困難な状態になった。でも『アート』の視点で見ると面白い空間が展開できる。全国的にアート活用の試みは数多い。その活動を契機にして建物を維持しながら、次の世代に伝えていくために、建物の活用メニューを検討、実践しながら、地域との信頼と連携につながる道を求めていくべきであろう。2年前から若者や女性の関わり芽生えている。

1. 保阪邸の道具蔵と庭園体験の継続

【目的】周囲の自然と連なる園芸体験として初夏の庭園と道具蔵を有料公開し、予約なしで苔玉作りを継続。秋の自主公開では、保阪家の婚礼衣裳展示と「蓮の香り体験ワークショップ」を実施した。

【庭と蔵のコレクション展示】7月3-5日に古伊万里などの陶磁器を展示。苔玉作りは9名が参加。

【婚礼衣裳と蓮の香り】10月29日には離れ座敷で婚礼衣裳、道具蔵は古伊万里を展示して「香りの体験」に12名が参加した。通常の名家一斉公開とは別日程のチラシを印刷配布、SNSと月刊キャレルで広報した。



図1 保阪家住宅主屋の客用玄関は、旧家の佇まい。

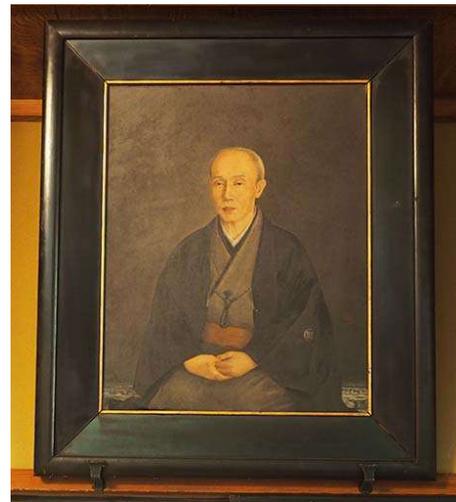


図2 曾祖父の保阪貞吉翁は明治維新後に蓮根栽培を奨励。



図3 離れ座敷には婚礼の打掛と諸道具、髪結の装飾を展示。
(婚礼衣裳に関する考察と説明は別資料を添付)



図4 温室と勝手口前雁木で園芸体験、奥は道具蔵。



図5 道具蔵1階のギャラリーに古伊万里陶磁器を展示。



図6 蓮に関わる様々な話題を聞き、香りの調合を体験。



図7 蓮の香りボトル用にオリジナルシールを作成。



図8 ボトル用の袋を試作し匂い袋などへ展開を図る。

【活動の広がり：津有ってどんなところ？】

昨年に続き、6月10日に四ヶ所町内サロン活動で苔玉作り体験を実施。参加者11名は苔玉作りにも慣れてこられた。竹内稔さんの木工は独自の町内活動として継続し、四ヶ所町内との地域関係つくりにつながっているが、戸野目町内は動きが遅い。

また、津有区地域協議会が独自の予算で地域を広く知るためのパンフレットを作成した。区民のアンケートから課題を示し、身近な歴史と文化をめぐるスタンプラリー（令和7年3月まで継続）には雁木通りと保阪邸も参加している。（別添資料参照）

【活動の広がり：地域の歴史的建造物の視察】

高田の雁木通りのまちなみと町家は、日本海側の多雪都市の特長である。建築と都市計画の研究者の視察見学もコロナ以前に戻ってきた。11月初めに、NPO 法人木の建築フォーラム主催の「伝統木造建築のレジリエンスを学ぶ」講座で15名の現地視察を受け入れた。高田小町から市内の雁木町家を見学し、翌日午後には、四ヶ所・戸野目の雁木通りから保阪邸とフィリップス邸を案内した。



図9,10 高田の雁木町家と戸野目フィリップス邸を案内。

【活動の広がり：文化財活用と景観保全】

保阪邸の主屋と離れ、道具蔵、温室の4棟は、文化庁審議会の答申を受けて令和6年3月6日の官報により国の有形登録文化財となった。隣接する『怡顔亭』（旧保阪家客殿）も同時に登録されて、所有者は滞在型観光事業を検討している。この地域の観光資源として認知されたと考える。近隣の一棟貸ゲストハウス「柳精庵」とフィリップス邸、旧丸山家も含めて、文化財の活用と特徴的な農村地域の景観保全について、行政も検討を進めるべきと考える。

通常の名家公開以外のツアーを積極的に受け入れて、独自の企画を工夫することで新規来訪者とリピーターの満足度向上を図りたい。歴史文化ツアーの企画コーディネーターの助言が必要になるだろう。

2. 次世代と地域へ『つぎつぎ vol. 3』編集発行

【目的】

一昨年に創刊した「つぎつぎ」は昨年2号、今年は3号を発行した。自主的な紙媒体作りを通じて地域内外の連帯感を醸成するために、雁木町家の住民から市外県外居住者や若手事業者への発信手段となることを目指している。今年は各世代の女性と起業者の目線から地域を考える編集者が集まった。

【実施状況】

8月から編集メンバー募集を開始し、報道案内と同時に SNS (Facebook) 広告も行った。当初の4名に口コミで2名を勧誘した。写真の得意な人や宿泊業務に携わる人など30~50歳代のメンバーで、昨年に続いて子育て中の女性が参加。金沢勤務の男性は週末とチャットでの意見を出してもらえた。

計画通り、昨年同様のA4版8ページ構成として、各自の希望により取材先と担当ページを分担して、現地取材と写真撮影を実施。連絡はメッセージンググループ、編集作業はドライブを活用した。対面の編集会議は5回行い、表紙の写真も数点の中から絞ったものである。3年目の編集校正に少し慣れてきたので、レイアウト校正作業だけを外部デザイナーに委託した。一斉ポスティングは効果が見えにくいことから中止して、高田小町などの主要公共施設と観光拠点、及び取材関係先に情報発信と配布を依頼している。雁木のまち再生のホームページとSNSでも、画像とPDFデータを公開している。

【つぎつぎ3号 編集の過程から】



図11 2号から3号へ「つぎつぎ」とつながる雁木。



図12 南本町3丁目の雁木は灯りの見せ方を工夫している。



図13 戸野目では音楽を通じて若者の参画が見られた。



図14 市外からの移転開業と起業で雁木通りが賑やかに。



図 15 雁木のまち再生ロゴ : Facebook/Instagram/校友会報



図 16 今年も「越後高田」として町家の日に参加。



図 17 大町5丁目には「オフィスたてぐや北川」開業。



図 18 「空のおもちゃ箱」の移転し、新しいカフェも近い。



図 19 雁木のまち再生が取得した元八百屋に近くの八百屋が移転する。「アキヤアケル日」で町家のシェアを公開募集。

【今後の予定】全国への発信の機会

全国まちなみ保存連盟の会員向けに配布を依頼している。また6月に金沢で開催される北陸甲信越ブロック会議と糸魚川での新潟県美しいまちなみフォーラムに参加して配る予定である。そのほか、全国向けの空き家対策講座など、随時発表の機会を紹介していきたい。

取材したベーグル店の通販便や地場産米と野菜の産直を行う農業者に、県外への発信を依頼している。東京有楽町の上越産品販売店「雪國商店」にもつぎつぎ3号の設置を予定している。高田高校校友会誌の広告と同窓会を通じた賛助会員募集も行うことで、多様な発信手法により、つながる関係が増えている。

3. ホームページ継続とSNS連動効果

【経過報告】

昨年の助成事業で開設した法人ホームページは、Facebook/Instagram に連動して情報発信を継続し、表面に出にくい空き家情報も紹介している。昨年に続き、今年も大小4件の空き家を継承してもらった。大学や事業者からの問い合わせも増えている。

SNS広告は低予算でも効果的な組み合わせと発信時期と対象を検討していく。従来のマスコミ報道と対面アピールの機会も探していきたい。特に「つぎつぎ」で取材した町家は、その後の経過を把握していくべきと考える。

【活動の広がり：町家の日】

昨年に続いて「3月8日は町家の日」サイトに越後高田のイベントを掲載していただいた。雁木のまち再生が窓口となり、町家を活用する個人や団体を募って、雁木通りでの演劇や町家の音楽ライブなど多くの催しを全国向けにも発信した。今回は新潟市と盛岡市の町家活用団体が参加して、相互交流も行っている。また、町家の日発祥地の京都の講演会に参加させてもらった。

3月6日には、町家の日ウィークに初参加の盛岡市を訪問して紺屋町と鉦屋町の町家活用を案内していただいた。高田の町家とも似た空間構成であり、店先に幅の狭い雁木が残されている商家も見られた。地元のNPOによるまちなみ景観保全の取り組みを参考にして、今までの活動とネットワークを引き継ぎ、次年度も効果的な情報発信の継続を図りたい。

4. 今後に向けて

【地域連携の在り方を探る】

上越市役所から依頼される見学や、観光事業者の現地視察に協力するなどの機会は増えている。目的の明確な観光や研修は、社会貢献プログラムにつながると考える。上越市や新潟県を通じて、首都圏などの関係機関にアプローチを進めていきたい。

上越市が目指す「通年観光」の施策は、地域事業者の連携により観光まちづくりの中核を担う組織を立ち上げることである。公共施設の実証実験や指定管理の受け皿、自主事業の運営により雇用が成り立つ仕組みをつくって行かねばならない。当法人がそれを担えるか不明ではあるが、まずは、住民の暮らしを維持しながら雁木町家地域の通年観光の機会を広げることが求められる。

【防災まちづくりを考える】

もとより、雁木地区は高齢化と若者の流出により、除雪や火災への対応に不安に感じている。元日の能登半島地震で大きく揺れたものの、暖冬少雪は不幸中の幸いであった。さらに雁木通りの南北の一面で2月と3月に火災が続いて、本町6丁目では放置された空き家から6棟に延焼した。旧市街の木密地域は、厳しい現実と直面している。

重伝建地区に指定されている若狭熊川宿では、密集地で火が出たら隣家で警報がなるシステムを整備して、初期消火訓練を実践している。空き家の場合はお隣が鍵を預かり、緊急時は入口の破壊を申し合わせているそうだ。高田でも参考にできないだろうか。

【地域活動に展開する】

四ヶ所・戸野目地区では住民との関係を大切に近所などから新たな試みを続けている。保阪邸を核とする観光ツアーも団体が通過するだけでなく、滞在して体験できる仕組みを検討していく。

次年度は地域の有志者と協働で保阪家の庭と周辺の自然植生を学び、草刈り作業と園芸を通じて自然と親しむ親子向けの体験プログラムを提案している。

【情報発信と交換を探る】

「つぎつぎ」は資金調達を含め、編集から印刷と配布方法を検討し、何らかの形で継続するために、いままでの協力者や賛助会員とも協力していく。

取材対象となる事業者にとっても、単なる広告ではなく、オリジナルの情報発信になるだろう。



図 20_盛岡の町家にも「雁木」に似た軒庇がある。



図 21 高田雁木通り北部の空き家火災（2月）



図 22 高田雁木通り南部の火災（3月）

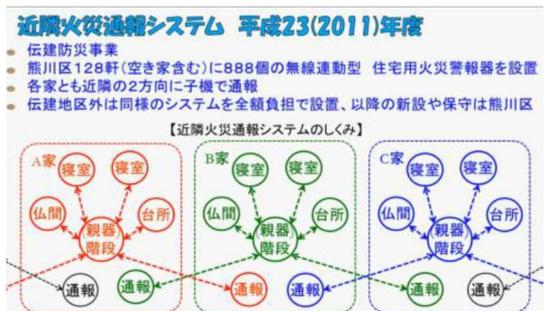


図 23 近隣火災通報システムの仕組み（若狭熊川宿提供）
住宅用火災警報器が戸別でなく両隣に連動する。

【雁木のまちを次世代に】

地方都市の安心感は共助互助の精神に基づく地域社会の距離の近さといえようが、それが気苦勞の種になるとともに、進学と就職の機会に地元を離れていく人は多かった。経済成長期だけでなく、停滞期でもほぼ同じ傾向は今日に至っている。

その反対に、新規移住者やゲストハウス事業は、従来の町内で受け入れられるだろうか。カーテンで見えなかった町家に灯がともしり挨拶を交わす間柄になり、除雪や町内行事に積極的に参加してほしいという声を聞く。高齢者だけではできないことが増えてきた。

新型感染症を経験した社会では、様々な価値観を持ちながら、居住と仕事を選択できる余地が生まれつつあると感じる。江戸時代の大地震や昭和の戦火にも生き延びてきた「越後高田」の雁木のまちは、互助共助の精神に支えられてきたといえるし、地域コミュニティ存続の原点といえよう。そのような社会関係を上手くやりくりする中で、エコロジカルでエシカルな生活文化を伝える雁木のまちを、次の世代に引き継いでいきたい。



図 24 雁木の途切れた駐車場から食料品店の灯りを見る。

参考文献

上越市高田雁木現況調査報告:2018年 新潟大学 黒野弘靖
高田の町家と雁木の文化的価値について:2015年 同上
雁木:日本一の多雪環境がつくった気候景観 山縣耕太郎
(ぶら高田:2014年 代表著者 浅倉有子)
町家読本:2010年 上越市、新潟大学建築計画研究室編集
地域開発 vol.590 :2013年 (一財)日本地域開発センター
特集 ローカルデザインから地域の未来を考える
町家の活用促進に係る調査報告書:2019年 上越市

協力者への謝辞

庭園体験 (苔玉、蘭、多肉アートとツアー案内)

保阪家庭園の植物基礎調査 (次年度に継続の見込み)

道具蔵の香りのワークショップ

宮崎 薫 (香りナビゲーター、早稲田大学講師)

保阪洋子 (保阪邸道具蔵体験会場と事前準備)

クリス・フィリップス (講座見学案内、駐車場整備)

つぎつぎ vol.3 編集室

川田光、齋藤菜摘、笹川千佳 (表紙写真) 野口明子

日浅智恵、朝倉洵平 (地図監修)

宮澤恵 (レイアウト校正)

各ページの取材に協力いただいた皆様

ホームページによる情報発信

オフィスジルベルト 野口慎一 (ホームページ作成管理)

三年間の活動にご協力ご尽力いただいた皆様に感謝します。

2024年3月 一般社団法人 雁木のまち再生 理事一同



図 25 雁木通りの敷石、木格子、木製看板もまちなみ景観